湾岸戦争が変えた運命
～家族の絆とニュージーランドの留学生活

京都大学大学院医学研究科　泌尿器科学　教授
小川（おがわ）　修（おさむ）

人の運命は何に左右されるか本当にわからないものです。一九九〇年当時大学院生だった私は、指導教官の推薦で米国の国立衛生研究所（NIH）に留学が決まっていました。しかし、一九九一年初めに起こった湾岸戦争のため留学がキャンセルとなってしまったのです。米国の戦費がかさんだため、海外研究者へのサポートが抑制されたためでした。留学をあきらめていた私でしたが、縁あって家族と共にニュージーランド（NZ）へ留学をすることになりました。場所はダニーデンというスコットランド移民が作った南島の町で、オタゴ大学というNZ最古の大学があります。有名なクライストチャーチから車で五時間くらい南に下ったところにあり、当時の人口は約十万人だったと記憶しています。

一九九〇年初めはインターネット環境が無く、渡航前に十分な情報収集も出来なかったので、不安一杯でダニーデン空港に着きました。住む家も準備出来ていませんでしたのでモーテルで数日を過ごしました。到着した翌朝にモーテルの窓からみたNZの真っ青な空と牧草のにおいが、鮮明な記憶として残っています。このオタゴ大学で小児の腎腫瘍（Wilms腫瘍）の分子生物学研究をAnthony Reeve（Tony）教授の元で開始したのです。

渡航時には上の娘が六歳、下の息子が四歳でした。当時ダニーデンには日本人は数家族しかいませんでしたので、当然、日本人学校もありません。地元の普通の小学校と幼稚園に通わせました。最初は英語がわからずに苦労したと思いますが、そこは子供の柔軟性。友達を次々と作って、一年後には普通に英語で意志疎通が出来るようになっていました。

二年間の留学生活は本当に充実したものでした。NZで一番気に入ったのは、まず自然の美しさと雄大さです。休みを利用して家族で南島のほとんどを回りましたが、マウントクック、フィヨルドランドなどのすばらしい景色に心を奪われました。海岸にいくとすぐ会えるアザラシやペンギン、ダニーデンで有名なアルバトロスのコロニーなども印象に残っています。

次は時間がゆっくり流れるゆとり感です。実験室からは午後五時で人の気配が消えます。深夜までこうこうと電気のついている日本の研究室からは想像できません。夕方には子供達と庭でバーベキューをしたりしてよく遊びました。夏期は十時くらいまで明るいので、仕事が終わってからでも家内とゴルフを楽しむこともできました。誰もいないコースを五〇〇円くらいのフィーで回ることができ、途中、景色を眺めながら持参のワインを楽しむこともできました。今の家族の絆の一部は確実にNZで作られたと確信しています。

あれから二十年以上が経ちます。娘はよほどNZが気に入ったようで、オタゴ大学の卒業生となりました。昨年、ダニーデンを十年ぶりに家内と訪れました。なつかしい顔に出会うことができましたが、留学中親切にしてくれたTonyの奥さん、NZ人と結婚した日本人女性研究員のKさんは、それぞれ癌を患って他界していました。Kさんのお墓は家内とワインを楽しんだゴルフコース、太平洋を望む九番ホールのグリーンそばにありました。